

2020年5月20日

五期会通信

逗子開成高等学校第五期卒業生同期会広報

発行
逗子開成五期会
〒249-0005 逗子市桜山
6-1326-52-101 栗風方
☎ & FAX 046(873)6212

編集・制作
五期会編集室
〒146-0082
大田区池上7-27-17 森園方
☎ & FAX 03(3758)0600

令和元年秋季五期同期会 11月6日鎌倉アスターにて

先は見えねど今がある



2019/11/06

秋季懇親会出席者

浅野 功英	呉東 泰助
栗屋昭太郎	近田 武司
臼井 康博	佐野 定正
衛藤 和夫	嶋村 忠男
加藤 勝次	白井 好之
金原 健一	鈴木千鶴子
川村 千鶴	土居 繁子
神田 隆介	森園日出樹
菅野 仁	山口 勤
木下皓司良	(十九名)

五期会はおおくの友をうしないました。それぞれに忘れられない癖がありました。思い出にホロッとして合掌すると、彼らはニヤッと、長生きしろよ、と云うのです。

五期会に出席すると、私は背中が痒くなることがあります。ただ運がいいだけで生き長らえて、同じく生き長らえている七十年来の仲間埋没できるのだから、痒いのは、この幸運に高揚して、血流がよくなり、体があったまるせいだろうと思っています。

五期会で、私はさらなる運を拾うのです。(森園)

(校歌斉唱)



令和元年秋

八十四歳の懇親会

(左より川村千鶴 鈴木千鶴子 土居繁子)



(左より佐野 衛藤 浅野 木下)



(左より白井 森園 神田 近田 吳東)



(左より山口(勤) 加藤 金原)



(左より宮野 嶋村 白井)



ファミリーヒストリー

臼井 康博

老いて懐旧の念

NHKに「ファミリーヒストリー」という番組がある。俳優やらタレント、歌手などの芸能人が登場して家族のルーツや両親、祖母、曾祖母らを回顧する、という番組だが、NHKのスタッフが出身地、親族、家族、友人、知人らを訪ねまわって取材して裏を取っている。当人が知らなかった家系の諸々を知らされて驚いたり、感動したりする表情に魅せられている。

これまで樹木希林、市川猿之助、北野武、デビ夫人、武田鉄矢ら錚々たる人たちが出演している。先祖が戦死したり、シベリアへ抑留されたり、空襲や疫病で亡くなったり、生活苦でたまたかたりしたことを知らされると、出演者たちはハンカチを取り出し涙を拭いていた。

ある日の「ファミリーヒストリー」に「爆笑問題」の太田光が出ていた。

祖父は静岡県磐田でふとん屋をやっている、安眠できる新しい枕を開発してよく売れたのだが、株に投資して失敗した。父は米相場で倒産したと知り、彼は「ふふふ……」と笑って、「みんな失敗があるんだよね」と言った。そして「先祖を辿ればみんなサル」これには笑った。さすがコメディアンを受けとめかたは違う。波乱をジョークにしてしまうところに妙に感じ入った。

そういえばうちの爺さんも投機に失敗して身代を失ったと言っていたのを思い出した。私にしてからが、

退職金を株に注ぎ込んで痛い目に遭っている。

わか家談

仕事を辞めて時間ができたので、生まれ故郷が懐かしくなり、静岡市街から安倍川上流、富士の裾野、三島、伊豆本島から下田まで、ゆかりの地を数回に分けて訪ね廻ったことがある。

私の家は歴代商人であった。断片的にはあるが、祖父から曾祖父の先代までは世渡りのさまざまを聞いたことがあるがそれ以前のことにはわからない。

ところで、曾祖父を「ひいじい」というのが、その一代前は何というのか。子供の頃「ひいひいひいさん」と言っていたが、辞書を引いたら「高祖父」と出ていた。知らなかった。

その高祖父は長左衛門、曾祖父は磯吉、祖父は長太郎、父は福司という名で、菩提寺の過去帳と墓石に記されている。

わが家系のルーツは伊豆の下田である。

墓が三島にあるのは、長



祖父臼井長太郎 79歳没

太郎が三島に定住した時に下田から移したらしい。

祖父の浮城

下田は江戸時代末期、港湾都市として栄えた。陸路で上京するのは大変だったが、大阪や下関などへの航路が通り、横浜へは定期船が通っていた、と祖父は言っていた。

安政四年、米国総領事ハリスとの間で「下田条約」が結ばれた。更に黒船といわれたペリー提督率いる米インド艦隊の来港などに祖父は刺激を受けて成長したらしい。

祖父は定期船で横浜へ出

向き、外国人から舶来品を仕入れ、下田に持ち帰って大儲けしたという。下田の街で初めて自転車を買ったというのが自慢であった。祖父はいい気になって浮かれていた。

折から日露戦争が始まり、物資が不足するという世情に買占められ、米麦砂糖などを買い占めた。だが予想に反し、戦争は短期に大勝利。物不足は起きなかった。

在庫品を捌けずに大借金を背負い込んだ祖父は、債権に追われて夜逃げをした。後年伯母から聞いた話だ

(次頁につづく)



戦前の下田の花街川端通り

が、爺さんにはあきれた艶間があって、結婚式に花嫁が二人いたという事件を起こしている。式当日「嫁になるのは私だろう！」と大声で式場に乗り込んできた女人がいた。事を納めるのに、仲人や親類縁者が大変苦勞したらしい。

祖父と結婚した私の祖母に当る人を孫たちは知らない。奔放な夫に仕える心勞が祟ってか、一男二女の子を残して早生した。

私ら孫たちが世話になったおばあちゃんの後妻さん

である。戦時中、私と妹がこのおばあちゃんのもとに疎開した。おばあちゃんは孫の面倒をみながら、雑貨の店をやっていて、家事にも手を抜かず、よく働いた。晩年、私に代って妻がおばあちゃん孝行をしてくれた。感謝！

人買いの罠

夜逃げをした祖父は満州へ行こうかどうしようかと、駅で迷っているところを、人買いというやつに引っかけた。「いい給金ですよ。

北海道へいかないか。前金もあるよ」という口車に乗って、あっさり方向転換。

とにかく前金が欲しかったところが、北海道ではひどいことになる。ごろつき共に取り囲まれ、前金はまきあげられ、たこ部屋に拘束されて炭坑でこき使われた。このままでは殺される

と脱走の機会をうかがった。ひと月ほど経った真夜中、見張りの目を盗み、厠の窓からちやっと外に飛び出した。熊がでるかもしれないという暗い森の中を裸足で夢中に走り、明け方、幸運にも小さな村にたどり着いて辿り着いた、という。

寒さと恐怖でガクガク、ヨタヨタになった男の話聞いた村の人は、ひどく同情し、助けてくれた。そんな村の人たちを神様だったと爺さんは言っていた。体力が回復して旭川に出て、なんとか独立できるようになった祖父は、伊豆に残してきた妻を呼び寄せ、北海道での生活を始めた。私の父は北海道で小学校に通った。冬は豪雪となり、



父曰井福司(左)の静岡の時計店 右は店員さん

スキーで通学した。父はスキーやスケートが得意だった。

父は祖父と違い、あまりものを言わず、おとなしい性格だった。父から叱られたことは一度もない。

祖父は母親(私の曾祖母)

にせがまれて、父の小学校卒業を機に本州にき上げ、三島で祖母と雑貨店を開業した。

戦時中、私と妹はここに疎開した。空襲警報が鳴ってB29が飛来してく

(次頁につづく)

ると、祖父は「お前たちは早く防空壕に逃げろ。俺はここで死ぬ」と言っていて動かなかった。「こんなバカな戦争をして勝てるわけがねえだろう。アメリカをナメやがって、アホ共が！」祖父の声は近所にも聞こえた。

父の苦闘

父は叔父（祖父の弟）の時計店で修業していたが、母と結婚して、両親や身内の後押しで静岡に時計店を開業した。開店間もなく、昭和十五年冬、不運にも静岡が大火災に見舞われた。



三歳の誕生日の白井康博

父の店は全焼してしまった。父は静岡の店を諦め、横須賀の時計店に勤めた。その後戦時中は徴用され、中島飛行機で設計士として戦後まで働いた。

戦後は友人の店を継ぎ、錫やチェーン、ローブなどを扱う船具店を経営した後、基地ヨコスカで米兵相手のスナックバーに転業した。子育てに苦勞し、浪費癖の母に手を焼いたようだ。さてここで、この年になって我が身を振り返る。戦中戦後苦しかったが、森園の『いい時に生きた』と子らに言いたい。

『おれの一枚』

上田 睦雄

森園様
大変ご無沙汰して申し訳ありません。
いつも「五期会通信」を

有り難うございます。
ますますお元気のようですね。
何よりです。
今回の懇親会（令和元年



上田睦雄 昭和44年五月五日谷川岳平神峠にて

十一月六日）も出席できなくて残念です。
「五期会通信」八十五号の表紙の写真をつくづくとながめました。懐かしい顔顔です。半数がもういません。目がうるみました。
私がすぐに分かった友の顔は、川村、喜多村、土部、吉田、高井、森園、山口、狩野、神保です。もう一人はたぶん向笠だろうとおもいますが、あとの二人はどうしても分かりません。だめですわえ、惚けました。
学生時代、吉田、高井、山口、狩野、神保、川村とは仲良くさせて貰いました。
『おれの一枚』の写真は、約五十年前のもので、五月の連休に、谷川岳天神峠から滑降（パラレル）しているところです。
スキーを習い始めたときの先生はプロスキーヤーの三浦雄一郎さんでした。二十八から四十歳までスキーに熱中していました。それ以降は現在まで、剣道一筋です。七段を取得しました。今でも道場で少年少女を教えています。
上田

川柳覗き見

《医者よりも薬よりも酒が効く》茶葉齋

「お薬を出します。少し様子を見よう」と、面倒臭そうに常套句を言う。抗生剤、解熱剤、胃腸薬、栄養剤その他もろもろを処方する。数打ちやあたるのだろうか。

「病名はなんですか」、訊かずにはすまされない。医者は「それはおおきな病院で、いろいろ検査しなければわからない」。判らなければ薬なんかだすな。怒鳴りたいが、八十五歳の知識人、怒鳴れば惨めになる。

薬には必ず副作用があった、病状よりも辛い症状に悩まされることになる。医者は副作用も説明しない。

茶葉齋先生は処方薬は飲まない。飲むものがないから、酒を飲む。自分の体を医者よりもよく知っている。ほら良くなったではないか。めでたしめでたし。(森園)

第二十六回



愚痴の闇

茶葉齋 白井康博

医者よりも 薬よりも 酒が効く

長生きは いやだと言いつつ 医者通い

愚痴の闇 聞く人おらず 独り言

生きてるの？ 女房毎朝 顔覗く

長電話 友のグチから 逃げられず

車椅子 寝たきり痴呆 寝汗かく

ありがたし 叱ってくれた あの教師

付度は わかるがちよいと やり過ぎる

あの頃は パワハラセクハラ 溢れてた
したたかさ どこがいちばん 米中露

形見分け

森園日出樹

あっイテテ 悲鳴ばかりが 若々しい

さっそうと 老いてみたくて 転倒す

ウォーキング 百歩あるいて はいおしまい

老醜を 煙製と言った 女あり

風呂上がり 見たくないやつ ミラーにいる

未亡人 なった時から 年とらぬ

人生の はじめとおわり おしめなり

死ねないよ 保険の契約 切れたので

誇り捨て、恥をあつめて おしまい

形見分け 入れ歯と補聴器 ほしいひと

間に合った 通夜葬式の 簡素化に

核でなく 菌で世界が 消えてしまう

五期会会友

- ① 浅野 功英 故小泉 広次
- ② 我妻 幸雄 故小柳 錦二
- ③ 故東 寛人 小池 寛
- ④ 栗屋昭太郎 故小嶋 肇生
- 飯田 孝夫 故小峰 八郎
- ⑤ 飯塚 昌義 故小東 泰助
- 石井 栄次 故河野 寅雄
- ⑥ 石井 照之 故河野 武司
- ⑦ 石原 眞司 近田 英樹
- ⑧ 市川 泰 故嶋村 忠雄
- ⑨ 故豊谷多実夫 故島崎 二男
- ⑩ 故一之瀬愛純 清水 義光
- ⑪ 上田 謙雄 故白井 好之
- ⑫ 上野 康吉 故白須 正喜
- ⑬ 植松 正 故白水 汎
- ⑭ 故白井 康博 故神保 愷
- ⑮ 故衛藤 和夫 鈴木 孝男
- ⑯ 故遠藤 義幸 故鈴木 肇一
- ⑰ 大須賀 正 故鈴木 康一
- ⑱ 岡田 定之 故鈴木 伸美
- ⑲ 興津 実 故鈴木 康夫
- ⑳ 落合 隆義 故鈴木 幸夫
- ㉑ 小滝 輝臣 故須田 泰正
- ㉒ 小畑 修 故高井 宏
- ㉓ 梶谷 竹松 故高田 紀光
- ㉔ 加藤 勝次 故高橋 利夫
- ㉕ 狩野 利招 故高橋 利夫
- ㉖ 故川村 統 田中 彰
- ㉗ 金原 健一 清山 輝夫
- ㉘ 故神田 隆介 故時田 貴
- ㉙ 故青野 仁 故土居 鑑男
- ㉚ 故喜多村栄吉 故土部 宏行
- ㉛ 故木下信司良 故中村 祥一
- ㉜ 栗田 諭 故長尾伸二郎

- ① 故水野 周一 故森 章
 - ② 故南雲 公二 故森 啓
 - ③ 故渡辺 一夫 故森川 文男
 - ④ 故行谷 喜平 故森園日出樹
 - ⑤ 故根岸 正和 故森田 茂
 - ⑥ 故萩原 元夫 故守屋 明一
 - ⑦ 長谷川 一郎 矢島 常吉
 - ⑧ 林 勲重 故安田 旭成
 - ⑨ 故平田 雅彦 故柳原 正和
 - ⑩ 故吹野 靖夫 故山内 清司
 - ⑪ 故古谷 一之 故山口 信之
 - ⑫ 三浦 臣一 故山口 一丞
 - ⑬ 水留 洋一 故山口 衛
 - ⑭ 故宮内 良雄 故山口 勲
 - ⑮ 向笠 実 山下 肇也
 - ⑯ 故村井 宏 故山本 悦男
 - ⑰ 故村瀬 賢正 吉田 利夫
- ⑱ 印は当該年度会費納入済
令和二年三月三十一日現在
- 五期会年会費金額 三千元
振込返子桜山郵便局普通預金
002220・0・72254
返子開成五期会
- 振込料は五期会負担です。
赤色の振込用紙で会費のみ送
金してください。振込用紙が
お手元になければ、栗屋会計
幹事まで申し出て下さい。
年会費納入済みの⑱印に誤記
がありましたら、栗屋まで申
し出してください。五期会は年
会費で運営されています。

編集放談

私は高校三年の夏休みに
疑似日本脳炎に罹った。法
定伝染病なので、横須賀済
生会病院の鉄扉で隔離され
た病棟に、強制入院させら
れた。そのとき、ちらっと
死をみた。

「われ在る時、死来たらす、
死来たる時、われ在らず、
ゆえに、われ死を怖れず」
この言葉を菊池寛で読ん
だのはその前後だった。言
っていることは当たり前な
のに、なるほどと感心した。
うまく言ったものだ。

もともと名文句というも
のは、当たり前のことにな
意討ちをしかけ、それを簡
潔明瞭に、なおかつリズム
ックに言い表すから、人を
うなずかせる。

私は、このアフォリズム
は、じつは古代ギリシャの
エピクロスやルクレティウ
スが唯物論を立証した提言
だったことを後年に知って
ちよっとがっかりした。菊
池寛の短編が、主題がはっ

きりしていて好きだったの
である。
私の神経はいつも死の必
然にからみつかれている。
死は「いまだ来たらす」と
はいえ、来たときの死因を
予感できるほどに現実的で
ある。

それなのに、「死を怖れ
ず」の心境にはほど遠い。
死が怖くないと言ったの

は死をまちかにした喜多村
である。なぜ怖くないのか。
もう語勢がすかて聞きとれ
なかったが、理屈でないこ
とはたしかであった。

新型コロナウイルスで、もっ
とも危ないのが、私たち老
人だという。感染したらひ
とたまりもない。私は自分
がのぞむ病で死にたいと思
っている。

(森園)

令和元年度返子開成五期会会計報告書

(期間平成30年11月1日～令和1年10月31日) 会計 栗屋昭太郎

科目	金額	備考
<前期繰越金>	298,990	
<入金部>		
令和元年度年会費	156,000	会員52名
寄付金	5,000	鈴木安之氏 卒業生
五期会同窓会	125,000	25名参加
入金計	286,000	
<出金部>		
五期会通信印刷・資材費	108,559	五期会通信作成
通信費・振込手数料	56,237	発送 振込手数料・甲電
事務用品費・写真現像	17,044	封筒・宛名シール・現像
備品修理代	60,570	プリンター パソコン
五期会同窓会	125,000	健康アスター
出金計	367,410	
<次期繰越金・残金>	217,580	

本会計報告書の諸帳簿並びに証憑書類を検査し適正に処理されていることを確認した。
令和元年10月31日 監事 栗園 謙彦

記事中の同期会友の敬称は省略させていただきます。